

小樽宣言

第46回全国町並みゼミは、「北海道の心臓と呼ばれたまち」として日本遺産をめざす港町・小樽市を会場に、「小樽運河100年の歴史から考える：今、ふるさとの魅力を未来へ」をテーマにかかげ、2023年10月13～15日の三日間、台湾からの24名を含む約400名が参加して開催された。

小樽での町並みゼミの開催は3回目である。1回目、1980年の第3回町並みゼミは、運河保存運動のさなかに行われ、参加者はつづさに現場を見、これからは、歴史的環境の保存・再生こそ、都市計画の中心にすえられるべきことを決議した。2回目、21世紀最初の第24回町並みゼミでは、運河整備後の観光化やマンション開発、まちづくり運動と行政の果たす役割について話し合った。そして3回目。これまでの成果を、将来にわたり確実に継承していくための制度のあり方や体制を基本テーマとした。

初日、1992年の第15回吉井大会以来、20回以上の町並みゼミ参加を果たした台湾歴史資源経理学会秘書長・丘如華氏（チュー・ルーファ）さんの記念講演が行われた。丘さんは、台北の大稻埕（ダーダオチェン）の町並み整備をはじめ、日本との交流で果たして来た成果を振り返り、今後はほかの国の支援と一緒に取り組もうと呼びかけた。

続いて、小樽をテーマに講演とパネルディスカッションが行われた。講演は40年以上にわたり運河問題を綿密に調査し『町並み保存運動の論理と帰結：小樽運河問題の社会学的分析』の著書のある堀川三郎法政大学社会学部教授。教授は、現在の小樽は、かつての保存の論理に変わる理念を見つけることができず「終わりの始まり」にあるのではないかと喝破し、運動の再構築の必要性を、わかりやすい語り口で訴えた。続くパネルディスカッションは、その堀川教授が近年の快挙とする北海製罐第三倉庫の保存をになってきた若い活動家たちが登壇、今回のゼミのもうひとつのテーマが世代交代であることを印象付けた。

1日目の最後、各地からの報告で、今年94歳となった有松まちづくりの会の服部孫兵衛さんは、峯山富美さんの名言「ふるさとは近くにありて守るもの」「運河に杭は打たれても、心に杭は打たれない」を紹介、参加者一同に小樽運河運動の初心を訴えた。

2日目、参加者は早朝の運河清掃を体験の後、まち歩きと午後の分科会に臨んだ。まち歩きでは、要所要所で、高校生と小学生から説明を受けた。

第1分科会「地域固有の町並みを活かしたまちづくりと法制度」は、本ゼミの基本テーマ。函館、神戸の事例を参考に、小樽の歴史的建物をこれからも確実に保存していくためには、歴史まちづくり法の適用や重伝建地区の指定を視野に入れること、制度側の再構築も視野に入れるべきことが話し合われた。観光客で賑わう「堺町通り商店街」をとりあげた第2分科会「まちづくりと担い手」も、重伝建地区を始めとする制度を使いこなし、歴史的建物を守るという基礎の上にまちづくりを進めていくことの必要性が確認された。

第3分科会「水辺との関わりの再考：運河周辺の水辺環境づくり」は、市民にとって癒しの空間となるべき水辺（運河周辺）が、近寄りやすい心理的距離を感じる場所になってしまっ

いるのはなぜか、この問題をどうしたら克服できるかを、函館、鞆の浦の事例に学びつつ探った。確認されたのは、それぞれの地域特性を踏まえて「郷土に対する愛着を醸成する」「次世代に繋げていく」という、まちづくりの根幹にかかわる課題に取り組むことが欠かせないということである。

建物から火の見櫓まで、身近にある地域遺産のあり方をテーマとした第4分科会「持続可能な地域遺産まちづくり」は、京都や静岡の事例とともに、小樽での実践について多くの発表があった。地域の自立的な展開、地域遺産の地域とのつなぎ直しには、学びあいが重要であること、人々の日常に基づく活動が人生で一番幸せなこと、それが「愛される町」を育てていくことを確認した。

第5分科会「アートの視点から見た歴史的町並みの潜在的価値」では、小樽、横浜、台湾、札幌市手稲区での若い世代を巻き込んだアートプロジェクトの事例報告を通じ、歴史的資産にアートやアーティストの感性が入り込むことで、多様な価値の発見があること、プロジェクトの実現過程で異なる年代、専門の人々が粘菌のようにつながり生まれる経験の記憶が、次代の歴史まちづくりの創造力を育てていくことを確認した。

いずれの分科会も、それぞれのテーマにふさわしい歴史的建物が会場として用意され、小樽の歴史資源の豊かさを再認識した。

3日目は、重要伝統的建造物群保存地区をかかえ、歴史まちづくりを主要な政策のひとつとして取り組む、函館市の大泉潤市長、内子町の小野植正久町長を迎え、迫俊哉小樽市長とともに「市長サミット：町並み保存とまちづくり」と題する記念シンポジウムを行った。本ゼミでの成果を踏まえ、制度の活用と町並み保存、まちづくりはどうあるべきかについて語り合い、歴史まちづくりには、首長のリーダーシップのもと、継続的な取り組みが欠かせないことを確認した。

私たちは、優秀なガイドに導かれ、小樽には、木骨石造の倉庫、鉄筋コンクリートの工場や銀行建築から町家や住宅まで、明治から戦後に及ぶ、実に多彩な近代建築遺産が広範囲にわたって重層的に遺され、しかもその多くが活用されていることに、改めて目を見開かれた。また、町並みゼミの運営はもちろん、清掃活動、町並みガイドをはじめ、さまざまなまちづくり活動が、子どもから大人まで、たくさんの市民の献身的なボランティアで支えられていることに深い感銘を覚えた。

3回目となる小樽ゼミは、前2回と同様、わが国の歴史まちづくりのあり方について新たな展望を切り開く画期となった。私たちは、この小樽での体験を胸に、それぞれの町へもどり、新たな気持ちで歴史まちづくりに取りくむことを誓い、右宣言する。

2023年10月15日

第46回全国町並みゼミ小樽大会参加者一同